座談会『知の前提から市場とデモクラシーに向けて』のまとめ　（浦井）

以下、「（市場と）デモクラシーをいかに使いこなしていくのか」という議論に続くために、そのような視座を通してのまとめである。

１．【猪木先生の座談会当日のお話】

「知の前提」として、知に関する**ヴィーコ（反デカルト主義）**的立場から、**クリティカ**（デカルト的な理性的方法：**深層の真理**アレーテイアを求める理性を唯一の手掛かりとする）の偏重ではなく、**トピカ**（歴史的あるいはあらゆる記憶をベースに詩的な想像性を重視する方法：**真らしさ**を求めるもの）の復権が必要ということ。また、「市場と民主主義」については、民主主義が（とりわけ Voting といった側面を通じて）市場と似た構造を持つということ。そのことから、今日それら手段（制度）としての機能不全の、**主たる要因の１つをクリティカ先行のエピステーメーに偏った知というところに求める（※１）**。またそこから、公智に向けた、聡明の大智（福沢諭吉）たる**フロネーシス**（＝プルーデンテイア）の重要性。そして、特に今日の日本（を含めた世界）に向けた手掛かりとして、トクヴィル的な中間組織（健全な中間層・**少数派の防波堤**としての**結社**・地方自治 etc.）の重要性、そして「未来」と「われわれ」につながる宗教といったことが挙げられた。

２．【当日会場からの意見を含めて】

「祈り」と「宗教」、「記憶力」と「想像力」、投票と「学会賞」、中間組織としての「同窓会」、「制度設計」における問題、「会社経営の視点」、「（株式）企業」の問題、「労働組合」等々のやり取りがあった。今日の喫緊の課題たる「市場とデモクラシー（をいかに使いこなしていくのか）」という問いに向け、そのスタート地点としての多岐に渡る概念準備がなされたように思われる。またその一方で、現実として拡大している格差、そこで中間組織といったものの形成を可能にする力とはどのようなものなのか。我々は歴史の中にあってどのようなことができるのか（先駆性）。少なくとも「わたし」と「われわれ」いずれにおいても「独立」と「自由」といった問題への踏み込みが、この先に求められているように思われる。

３．【今後の議論の進展に向けて】

クリティカ偏重の痩せ細った（**深層の真理**だけを求める）エピステーメーではなく、豊穣な（**本当らしさ**を求める）トピカの重要性というものが、あくまでも出発点たる知の前提条件として不可欠なものである。しかし、少なくとも現実問題として、今日喫緊の課題への実践的解決を考えていこうという議論において、ここで終わることはできない。例えば、AI とはまさに（その原理的にも）「**本当らしい**もの」を創作する技術であり、それは大手メディアや大企業の「広告」、戦時の広報あるいは政策的プロパガンダといったものが、かねてからそうであるように、そういう「本当らしさ」の利用である**最低水準の理性行使**（サピエンテイア）の周辺に、分類されるものである。そして、特にそのような「本当らしさ」と結びついた現実（実践）上の「市場」（情報の非対称性を含めた市場支配力）の存在は、単純な利潤動機を通じて、今日の課題を一層過度に進展させている。本当らしさを通じた情報規制（検閲）、本当らしさを通じた公衆衛生、本当らしさを通じたデータ・政策科学、「本当らしさ（偽善）」を通じた「マナー（消費者・企業統治）」と「政治倫理（資金・ロビー活動）」そして「多数の専制としてのデモクラシー（平等・権利・多様性の政治的利用）」といったものが、今日「市場」を通して溢れ、拡大され、まかり通っていくという現状に、今日喫緊の重要課題（市場とそしてデモクラシーを使いこなせるのか）の核が存在しているように思われる。

とりわけ深刻なのは、そういう「本当らしさ」を通じて、何よりも**私たち個々、一人一人の「自由」（そして独立）ということが、制限されていく**という必然的な傾向（誹謗中傷に基づく検閲・思いやりと公衆衛生・戦争への加担、等々）である。

つまりここで、「本当らしさ」に対して「學知（エピステーメー）」がどのように向き合うかということが、より厳密かつ徹底的に問われねばならない。そう考えると、先の（※１）における 、「市場」と似通っているデモクラシーの問題点を、**第一義的にクリティカ偏重の学知という問題に求める**ということについては、今一度、精緻な問い改めが必要になって来るように思われる。

まず、**市場と民主主義**が「似ている」ということについて、その類似性そのものよりも、**その類似性を通じて（あるいはその類似性に反映されるものとし**

て）相互にその問題点と危機的な状況を共有しながら、変容していくものではないかということが、問われるべきであろう。またそのように**民主主義の問題点と市場の問題点をリンクさせて**考えることは、市場の問題点についての専門家である経済学研究者にとって極めて（その興味に於いても）重要な問いであり、その問いを極めることは、社会的責任としても、期待されているのではないか。

今日のデモクラシーの問題点を市場の働きとの連関を通じて問うためには、**スキエンテイア**（知識：どこまでも深層の真理アレーテイアを求める最高への理性行使）と**サピエンティア**（知恵：何処かの実践の段階で打算的たらざるを得ない最低水準での理性行使）の相違を明らかにし、その上で、**市場と知恵**（サピエンテイア）のつながりに求めるべきである（少なくとも「學」という立場・方法として）。これは「市場」を見下しているのではなく、むしろその逆で、そうであるからこそ、市場は（ホモ・サピエンスの）「下からの力」として、侮れない（そう簡単にはやめられない）のである。

民主主義もまた（それに「似ている」というのは）、そう簡単にはやめられない（侮れない）実践的かつ打算的な（凡そ「最悪」を避けるための最低水準の理性行使に基づいた）制度であるということ（ここではあくまで民主主義という言葉をその制度という面に限定して、いわばシュンペーター的に、用いるが）こそ深刻なことであり、平均的大衆に向けられた Voting における人気取りに代表される、問題はまさしくそこに存しているのである。そして、この「そう簡単にやめられない（侮れない）制度である市場とデモクラシーの相乗効果」が、今日の我々を危機的な方向へと、一斉に導いている。

故に、スキエンテイア（知識）は（ほんとうの）敵ではなく、そしてまた言うまでもなくクリティカとトピカが共に用いられねばならないということも当然の前提であり、大事なことはむしろスキエンテイアの下での、クリティカとトピカの**制御**ということにある。とは言え、そこには常に**実践**という壁が立ちはだかる。つまり現実（実践）上では、サピエンティア（打算的知恵）の下でクリティカとトピカの**使用**ということに我々は抗えない。そのことに対して、スキエンテイアは、それを常に新たに何処までも、制御し直し続けていかねばならない（ヘーゲルのカント批判「怠惰の褥」は許容されない）。そのような

反省と慎み、そして**罪責感**を伴った、そのような知、それがサピエンテイアとスキエンテイアを均衡させる**フロネーシス（＝プルーデンテイア）**として、位置付けられねばならない。

スキエンテイアによる制御（簡単に言えば**我々は根本から間違っているかも知れない**という永遠の問い直し）がなく、サピエンテイア（打算的な知恵）のみの下でクリティカ＆トピカ（真らしさ）が用いられるという実践の必然という問題を、今一段掘り下げてみよう。AI は「真らしさ」を製作し、私たち個々の「真らしさ」の感覚を**類型化**し麻痺させるそのようなクリティカ（情報処理機械）であり、それが市場の必然とともに利潤追求のサピエンテイア（ビックデータのマーケティング利用等）と結びついている。そのような下で用いられる「真らしさ」は、従来から食品添加物による「美味しい…らしさ」や薬による「健康…らしさ」、あらゆる宣伝広告による「流行…らしさ」といったことに表出していたところが、今や「知」そのものに向けて（「賢い…らしさ」）にまで広がりつつあるということである。これは（味覚・健康・美容 etc. と同様に）我々の「知」そのものの類型化（麻痺）という事態、情報規制（検閲・ファクトチェック等々）を通じて、我々の「知」の「自由」の喪失へとつながる。「知」の「自由」とはスキエンテイア（深層の真理＝アレーテイアを求める理性）そのものであり、サピエンテイア（最低の理性行使）における打算性が「真らしさ」と結びつくことで、スキエンテイア（最高の理性行使：実在に向けて何処までも問うという実践）を否定していくという事態である。これもまた「知」の「選択と集中」あるいは「ブランディング（商品化）」といった意味で（様々な賞・朝日・岩波 etc. といったことを通じて）従来から存在して来たものではあるが、今日それらは「市場（支配）」を通じて、平均化され多数化された力の専制とともに、拡大される傾向にある。

つまり、問題の中枢は、学知（エピステーメー）が「市場」（情報非対称性を含めた市場支配力）という実践を通じた最低の理性行使における（オルテガの言う専門人の野蛮を含めた）**大衆化**というところに求められるものであり、最高の真理への理性行使としてのスキエンテイア（知識）に向けて「その目ざすところを真の実在（リアリティ）・深層の真理から**乖離**させてしまう」ところにある。けれども同時に、その乖離は「市場」という何よりも**自生的な秩序**（ハイエク）における実践（プラクシス）という必然とも表裏一体なことがら

であり、知識（スキエンテイア）がその**社会**での**参与**とその**行使**を通じた**実践**の上に引き起こす、**自己横断的開裂**であるということにも注意が払われねばならない。即ち、その**乖離**は「回避すべき」ものというより、むしろ**市場に支配されない形で、「わたし」達の真の理性が、深層の真理（＝隠れた実在）を「何処までも問う」という実践に、健全に根ざすことができるということ（その意味での「問い」の自由と最広義のリアリズム）**、それを少なくとも**学の立場という（その実践に向けた）究極の根底に置かねばならない**ということ、そのことに尽きているように思われる。

座談会での猪木先生のお話に戻って締め括りたい。福沢諭吉の「一身独立」ということから、真の「独立」と「自由」ということに向けた議論の展開が可能である。即ち、今日、グローバリズムへの対立項として、ほぼ「悪」に近いものとして扱われる**ナショナリズム**の問題（中間組織としての**国家**の問題）、そしてまた公共性に対峙するものとされる「わたし」たち一人一身、個々の「**自由**」という問題につながるのでなければ、この議論の豊富な展開は望めない。これは今日の経済学理論においても国家の役割および個々人の信用、そして貨幣ということに向け、展開すべきところとして関連している。**個々の自由**と**国家の秩序**、これらを社会科学の（実践において守るべき）**常なるもの**として、トピカ、想像力、そして宗教も祈りも、そこに直結する**リアリティ**を囲い込むのでなければ、それはいずれ偽の「本当らしさ」によって、我々の知を麻痺させるものとしかならないであろう。そうしたアリズムの喪失は、とりわけ今日の「専門科学」において顕著であり、それを取り戻すことが今日（自由主義）社会における喫緊の課題と、言えるのではないか。（2024.9.29）

友　愛　　芸　術　　運　動

協　働　　ー　　創　造　　方　法

＼　常なるもの　／　　／　実　在　＼

経　験　　対　象　　ー　　認　識

霊　性　　社　会　　學　問

９月２１日（土）猪木先生を囲む非公式座談会に向けてのメモ（浦井）

――――――（猪木先生から頂いたプレゼンテーションのメモ）――――――

当日の小生のプレゼンテーション（30 分程度）の構成は次の通りです。

二つほど、議論のポイントをお話ししたいと思っています。

１）「知」の倫理学上の分類、位置づけについて
　　アリストテレスを出発点に、ヴィーコ、ヒュームなどの考えを振り返る
　　どの「知」を前提とするのか

２）デモクラシーと市場の「問題解決の手段」としての、構造的同型性、相違、欠陥、その最終的なかたち。両者はあくまで手段であり、目的ではない。

　当日の議論のきっかけになればと、当方からの追加的コメントのメモを追加させて頂きます。（１）は全ての前提になると思われ、その「前提」をベースに、今日極めて喫緊かつ重大なテーマである（２）「デモクラシーと市場」の問題に至るということで、座談会のタイトルとしては、

　　「知」の前提から今日の「市場とデモクラシー」に向けて

といった感じに設定させて頂きました。そもそも、この「市場」という問題を通して「民主主義」について考えるというのは、今日の経済学、とりわけ当方のような経済学理論家にとっては、今日社会での市場というものを１つの重要な解決手段と考える限り、自らの学問の意義そのものに関わる重大事項であり、学問全体の、すなわちその学問にコミットしていることの社会的責任が、問われるところのものと考えております。

　猪木先生の指摘される「市場とデモクラシーの構造の同型性」という問いは、今日に於けるデモクラシーの問題、議会制民主主義という制度、その機能不全あるいは行き詰まりといったものと、その同型および相違としての経済学的な社会の構造・機能との間に（相互に補完的な）密接な関連があるものとして、位置付けられる必要があるということを、今日「専門家」としての我々に示唆

して下さっているのではないでしょうか。

　１つだけ、今日、この「市場と民主主義」の「欠陥」ということにまつわる重要なキーワードとして、「分断」ということが挙げられると思います。この分断ということは、私たち個々人における個々の「自由」ということ、そして社会「全体」の成り立ちとの調和ということにおいて、「経済学」がそもそもの出発点としているアダム・スミスの見えざる手、あるいはハイエク的「自生的秩序」といった、経済学の根幹にもまつわる「自由」という価値観に向けて、むしろその意味を簡単に崩壊させ、放棄させてしまう危険性を孕んだものであるということを、しっかりと考えたいと思います。

　以下に、当日に向けた当方覚書を兼ね、猪木先生のお話に関連する形でメモ書き列挙させて頂いております。恐縮ながら語句のみになりますので、適宜、ご放念下さい。

【知】

● プラトン・アリストテレスから始まることは（学知・国家・民主主義といったいかなる意味からも）大事。

● サピエンテイア　スキエンテイア　プルーデンテイア

問い：どの知を前提？　←　「知」はそれが前提とされるなら、あくまでも皆が合意できる「唯一のほんとうの知」でなければならない。

【市場とデモクラシー】

● 同相性：見えざる手（条件：価格所与）　最悪を避ける（条件：平均人）
（欠陥：市場の失敗）　（欠陥：大衆の反逆）
↑　↑
● 相違：スキエンテイアの（市場）支配 → サピエンテイアの（多数）支配
↑
（データ科学・AI 技術）

【問題解決の手段】

「手段であって目的ではない」（極めて重要）　←　けれども現実としては

「お金が目的とされる：新自由主義」（「市場化」が「自由化」と呼ばれて目的化が施されている・実際ここで生じているのは「価値」感の喪失？）

「民主化（制度）が目的とされる：民主主義のための戦争」（ここで生じているのは「非理性」的な命、生存、快・不快等への反射的な対応？）

問い：「誰」の「いかなる」問題なのか？　←　「わたし」たちが「互いにうまくやっていく」ための。（「わたし」たち、「個」々の、目的についての「自由」があり、それでもなお、「全体」としての折り合いが「うまく」つくこと。）　←　通常これは「全」と「個」の問題として絶対的に不調和な調和（和辻が倫理学の根本問題と呼び、経済学がアローの命題と呼ぶ）。その一方で、例えば不確実性下の企業の行動でさえ仮に市場が完備でも一意的にはその目的を（目的関数として株主の予想平均といった形でもうまくいかなかったものを頭から入れない限り）良い形では定められない。そのように、全体の「目的」というものを、個々自由な目的から整合的に定めることは、容易なことではない。

↑

こういったことから、いわば今日の「上級国民」といった概念の背景に来るような単純な上下（貴賤というよりも単なる貧富に近い）といったことに見出される、ある種のニヒリズム（虚無主義）的なものは、本来（目的に向けての）「空（虚）」といった場所が持ち得るポジティブな意味を、喪失させてしまうのではないか（無常ということの意義）。　←　（これに向けて） 西谷啓二『空と即』のような相互包括的多元論。あるいは「空」＝「０」に「即」＝「代入」という操作と existential quantifier のビッグバン的なダイナミズム。幅を持った「理性」の行使として深層の真理（アレーテイア）を求める「學」を通じて「生きる」こととの関係。